



TITLE:

神策軍の成立

AUTHOR(S):

小畑, 龍雄

CITATION:

小畑, 龍雄. 神策軍の成立. 東洋史研究 1959, 18(2): 151-172

ISSUE DATE:

1959-10-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/148147>

RIGHT:

神策軍の成立

小 畑 龍 雄

神策軍の名がはじめてあらわれたのは、玄宗の天寶十三載である。『資治通鑑』²¹⁷に、

秋七月癸丑。哥舒翰奏。於所開九曲之地。置洮陽・澆河二郡及神策軍。以臨洮太守成如璆兼洮陽太守。充神策軍使。

と、それがはじめておかれた事情が記されている。しかしこれだけでは、その事情を充分に知ることにはできないので、さらに吐蕃との關係を少しさかのぼつて考える必要がある。玄宗の即位以來、吐蕃との關係は圓滑を欠き、しばしば邊境の不安に悩まねばならなかつたが、開元十五年十二月これに對する軍備を擴張し、十六年には大いにこれを破り、

さらに十七年三月朔方節度使信安王瑋は吐蕃の石堡城を攻略して、これを振武軍とする成果をあげ、ようやく唐は吐蕃を抑えることができた。吐蕃も戰敗を重ねたので、唐に向つて和親を求め、結局開元十八年唐と吐蕃とは使節を交換して、修交關係が成立した。二十二年には、赤嶺に碑を立て、吐蕃との國境を確認し、ここにおいて平和のうちに交渉が行なわれることになつた。しかし平和な關係は永續せず、二十五年吐蕃が勃律を撃つたことから、河西節度使崔希逸はこれを青海の西に撃ち、これより兩國の通好關係は斷絶し、ふたたび敵對關係がはじまつた。翌二十六年三月、鄯州都督杜希望は吐蕃の新城を攻略して、これを威戎軍とし、七月には吐蕃の河橋を奪い、鹽泉城を築いて鎮西軍をおいた。寧塞軍のおかれたのもおそらくこの頃で

あろう。それとともに、隴右諸軍の兵力を増強して、防備を嚴重にしたので、二十七年八月には、白水・安人軍の方面へ加えられた吐蕃の脅威を退けることができた。しかし、その後二年ほどすると、唐の勢力は後退せざるを得なくなつた。すなわち二十九年六月、四十萬と伝えられる吐蕃の大軍が河源軍・安人軍の方面へ迫つたのを撃退したのはよいが、ひきつづいて十二月に來襲した吐蕃軍は廓州達化縣を屠り、振武軍石堡城を攻めた。この吐蕃の攻勢に對して、かねて將帥たる資格がないと非難されていた節度使蓋嘉運は、振武軍を守ることができず、ここに開元十七年以來確保してきた重要據點を吐蕃の手に委ね、唐の優勢は逆轉して不利な位置に立つのやむなきに至つた。従つて、その後、天寶年間における唐の努力は、この退勢の挽回に向けられるのは當然である。天寶元年十二月、隴右節度使皇甫惟明が吐蕃撃破を奏したのは、その最初のあらわれである。しかしそれも、振武軍の喪失を怒り邊政を喜ぶ玄宗の意を迎えるためであるとも考えられるから、吐蕃撃破のことはそう大したことではなかつたかも知れない。ついで二年四月、積極的に西平郡から出動して洪濟城を破つた。こうして次

第に吐蕃に對する優勢な地歩が築いて行かれるようにみえたけれども、四載九月石堡城に戰つて一敗地にまみれるにおよんで、なお唐の吐蕃に對する非力ぶりが明らかにされた。五載正月皇甫惟明は宰相李林甫のためにしりぞけられ、これに代つて王忠嗣が河西・隴右節度使となつた。王忠嗣は前年から朔方・河東の節度使を兼ね、充分に邊境の軍備をととのえ、必勝の名將として知られていた。彼がさらに河西・隴右節度使となるや、さきに朔方・河東においてたくわえた軍馬の一部分を河西・隴右に移し、彼の掌握した唐の軍隊はいちじるしく強力なものとなつた。かくして彼は青海積石で吐蕃に勝つた。六載には、王忠嗣は河東・朔方の節度を辭し、もつぱら吐蕃に當ることになつた。吐蕃に對する戰備は天寶以來はじめての充實ぶりを示したので、かねて振武軍石堡城の喪失を遺憾としていた玄宗は、王忠嗣にこれを攻めさせようとした。しかし慎重をたつと彼は、石堡城の險固なことをいつて、その攻撃は時期尙早であることを述べた。ところが彼の部下の將軍董延光は自ら石堡城を取らんことを請うたので、玄宗は忠嗣にこれを助けよと命令した。しかし忠嗣は、數萬の衆を以て一城を得

ても敵を制するに足らぬ、自分の官は奪われても數萬人の命を救おう、と決心して、充分な助力をしなかつた。石堡城を攻撃した延光は失敗したので、忠嗣が軍計を沮んだと訴えた。その結果、六載十一月、彼に代つて、副使哥舒翰が隴右節度使となつた。

哥舒翰はもと突騎施の酋長哥舒部の出自といわれ、父道元は安西都護將軍赤水軍使として安西にいた。⁽³⁾ 翰は年四十餘で父をうしない、京師に客居していたが、長安尉に侮辱されたことに發憤して、河西節度使王倕の部下としてつかえ、軍功によつてはじめて名を知られるようになった。また節度使王忠嗣の下に衙將に署せられ、部下の心服するところとなつた。ついで大斗軍副使となり、苦拔海に、また積石軍に、吐蕃と戦つて猛將ぶりを發揮したが、天寶六載十月には隴右節度副使になつた。彼は單なる猛將ではなく、左氏春秋・漢書を読み、また財を士卒に施こし、その心をつかんでいたと傳えられる。かかる人物が王忠嗣に代つて隴右節度使とされたのは、隴右方面におけるその經歷および部下將兵との關係が高く評價されたからであらう。

玄宗が哥舒翰に期待したことは、王忠嗣に命令したとこ

ろと異なるはずがない。當時の現状維持にはとどまらず、進んで吐蕃の勢力を驅逐し、かつての優勢をとり戻すことであつたにちがいない。かかる玄宗の期待は、積極果斷を以て聞えた哥舒翰にふさわしいといえるであらう。

哥舒翰がまず着手したのは、從來しばしば吐蕃との衝突が行なわれた青海方面の備えを堅固にすることであつた。すなわち天寶七載の末、この方面に神威軍を設け、また青海中の龍駒島に應龍城を築いて、それによつて吐蕃の青海に近ずき来る危険を除くことができた。

こうしていよいよ天寶以來の懸案たる石堡城の攻略が哥舒翰に課せられることになつた。八載六月、玄宗は彼に、隴右・河西および突厥・阿布思の兵とさらに増援した朔方・河東の兵凡そ六萬三千をひきいて石堡城を攻撃させた。攻撃は困難をきわめ、王忠嗣がいつたように戦死者數萬を犠牲としたけれども、とにかく彼は部將を督勵して強引にこれを抜くことができた。こうして手に入れた石堡城を神武軍として唐の有力な據點とすることができたのみならず、吐蕃との國境であつた赤嶺方面に屯田を開き、さらに軍備を充實させ、翌年には吐蕃の樹敦城を抜いた王難得を

白水軍使として備えを固めるなど、哥舒翰の時になつて隴右における吐蕃に對する形勢は、従前に比してはるかに優勢となり、ここに唐の劣勢はよほど挽回されたことは疑いない。

石堡城を抜いてからしばらくは哥舒翰の活動は鳴りをしずめたようである。それはおそらくこの時こうむつた損失を補充し、さらに次の積極的行動への準備を整えていたのであらう。果して天寶十二載五月、吐蕃を撃破して洪濟・大漠門等の城を抜き、黃河九曲の故地を収めた。九曲の土地を失つたのは睿宗の景雲元年、時の鄯州都督楊矩が吐蕃に嫁した金城公主の湯沐邑として不覺にもこれを吐蕃に與えたことに由來する。吐蕃の洪濟・大漠門等の城はこの地を守るために設けられた。その後、吐蕃がひんびんとして入寇し、唐を苦しめることになつたのは、「その地は肥良にして頓兵畜牧するに堪え、また唐境と接近す」といわれる九曲(4)の地に據つて、その勢力を養ひ得たことが一つの理由である。従つてこの地に唐の攻撃が向けられるのは、吐蕃との對抗上必然的であつた。たとえば開元五年七月、隴右節度使郭知運が吐蕃を九曲に破つたことがあり、また十

六年七月には節度使張忠亮が大漠門城を抜いたことがあり、さらに前述のように天寶二年四月には皇甫惟明が洪濟城を破つたことがある。けれどもこれらの場合には單に一時的に吐蕃軍撃破に成功したにすぎず、それによつて九曲の故地を確保したのではなかつた。それが哥舒翰の力によつてはじめて成しとげられたのであつて、この重要な土地を収めることができた彼の功績が高く評價されるのは當然であらうと思われる。またこの重要な九曲の故地を確保していくためにはその附近に新しく軍を設置することも當然であらう。神策軍はその一つに外ならない。先には『通鑑』によつて、神策軍の設置について述べたが、その他の史書にもそのことは見えている。それらのうち、その位置をより明らかに示すのは『唐會要』⁷⁸ 諸使中、節度使の條の次の文である。

神策軍。天寶十三載七月十七日。隴右節度哥舒翰。以前年收黃河九曲。請分其地置洮陽郡。內置軍焉。以成如璆爲太守。充神策軍使。去臨洮軍二百餘里。

これに續いて、

宛秀軍。同前年分九曲置洮河郡。內置軍焉。以臧奉忠爲

太守。充軍使。

すなわち九曲の地に洮陽郡・澆河郡が設けられ、前者に神策軍、後者には宛秀軍がおかれた。右の二郡の位置については、『通鑑』217 胡注に、

洮陽・澆河二郡。皆置於洮・廓二州西南。

と説かれ、洮州は甘肅臨潭縣西南七十里、廓州は青海西寧縣の南方黄河の北岸にあつたといわれるが、これだけでは二軍の位置は、およその方向がわかるにすぎない。胡注には、さらに、

洮州西八十里。磨環川置神策軍。

とあり、『新唐書』40 地理志、洮州臨洮郡の條には、

西八十里。磨環川有神策軍。天寶十三載置。

とある。この磨環川あるいは磨環川が現在のどの川に當るのかは定められないが、『元和郡縣志』39 洮州の條に、

神策軍在州西八十里。天寶十三年。哥舒翰置。在洮河南岸。

とあることと考え合せると、神策軍の位置はおそらく洮河の河源附近に求められるのであろう。なお『新唐書』40 地理志、廓州の條に、

西有寧邊軍。本寧塞軍。西八十里。宛秀城有威勝軍。西南百四十里。洪濟橋有金天軍。其東南八十里。百谷城有武寧軍。南二百里。黑峽川有曜武軍。皆天寶十三載置。とあり、また河州の條には、

西八十里。索恭川有天成軍。西百餘里。鵬窠城有振威軍。皆天寶十三載置。

とあつて、天寶十三載、神策軍の設置と前後して、もとの寧塞軍を回復して寧邊軍をおいたほかに、威勝軍・金天軍・武寧軍・曜武軍・天成軍・振威軍の諸軍を、かつて吐蕃の勢力範圍であつたところに配置したことを知るのである。

これらの諸軍と神策軍とは、相互に近接しているとはいい難いかも知れないが、それらの九曲の土地に對する役割によつて互いに結びつけられていたのである。九曲とは青海貴德縣南方の、大きく灣曲した黄河に挟まれた廣大な土地を指すのであろうが、その九曲の東側は河州・洮州に近いと思われる。従つて神策軍以下の右の諸軍は、この土地を、東・東北・北からとりかこみ、かつその中に入りこんで配置されたのであつて、これらによつて九曲を確保し、

進んで積極的にこれを經營して、吐蕃に強壓を加え得る基地としようと企圖されたことがわかるであろう。しかしその企圖は少しも果されなかつた。安祿山の反亂が勃發したために、西方に向うはずであつた神策軍は、逆に東に向わなければならなかつた。

註

(1) 『通鑑』二一四によると二十七年正月、關内・河東の壯士三、五萬人を選舉して隴右に派遣した。

(2) 『通鑑』二一四、開元二十八年六月左丞相・裴耀卿がはげしい非難の上疏をした。

(3) 『舊唐書』一〇四、哥舒翰傳に、その父は安西副都護という。

(4) 『舊唐書』一九六、吐蕃列傳。

(5) 百衲本には、天寶十二載とあるが、正しくないと思われる。『元和郡縣志』三九、鄜州の條には、儀鳳二年におかれた砧石軍をはじめ、寧邊軍・威勝軍・金天軍・武寧軍・曜武軍の位置を示し、

右寧邊等五軍。並天寶十三年哥舒翰奏置とある。

二

天寶十四載十一月安祿山が敢て范陽に反亂を起した動機

の一つとして、彼が平盧・范陽・河東三節度使を兼ね、強大な軍事力をもつていたのに對して、京師を守るべき軍隊が弱小であつたという事實があげられる。當時の禁軍は、すでに府兵制度崩壞して募兵化され、一般的太平の風潮に慣れて、はなはだ弱勢粗質であつた。⁽²⁾『唐會要』72 軍雜錄に、

天寶末。天子以中原太平。修文教。廢武備。……惟邊州置重兵。中原乃包其戈甲。示不復用。人至老不聞戰聲。六軍諸衛之士。皆市人白徒。富者販繒綵。食粱肉。壯者^{すもつたひま}角抵拔河。^{ちかくくら}翹木扛鐵。日以寢鬪。有事乃股慄不能授甲。其後盜乘而反。非不幸也。

と。禁軍の墮落ぶりが傳えられている。反亂勃發の直後、京師では新しく兵を募集したが、集まつたものはみな市井の子弟で、到底強力な軍隊が編成されるはずはなかつた。⁽³⁾従つて玄宗の頼り得るところは、西北の重兵すなわち朔方・河西・隴石の兵にほかならず、哥舒翰の管轄訓練して來た河西・隴石の兵がその重要なものであることはいふまでもない。『通鑑』217 には、

〔天寶十四載十二月〕壬辰。上下制。欲親征。其朔方河

西隴右兵。留守城堡之外。皆赴行營。令節度使自將之。
期二十日畢集。

とあり、邊境の軍隊は、一部を除いて、中國内地に向つて
動員された。

安祿山が范陽に反したとき、彼は唐の宰相楊國忠を討つ
ことを名目としてかかげた。もと彼と楊國忠とは反目はな
はだしく、國忠はしばしば祿山の異志あることを玄宗に奏
していた。それは玄宗のきくところとはならなかつたが、
楊國忠は祿山を除くために、もとより祿山と不和な哥舒翰
と結んだのであつた。哥舒翰と安祿山とは、たがいに深刻
に憎惡していた。⁽⁴⁾いま安祿山の反するに及んで、哥舒翰が
兵をひきいてこれを阻もうとしたのは、從來の個人的な關
係からいつても、當然なことであつた。

神策軍は節度使哥舒翰の指揮下に出動した軍隊の中に含
まれていたであらうと想像されるが、『通鑑』²²¹ 肅宗上元
元年の條に、

及安祿山反。軍使成如璆。遣其將衛伯玉。將千人赴難。
既而軍地淪入吐蕃。伯玉留屯於陝。

とあり、衛伯玉が神策軍千人をひきいて反軍鎮壓に加わつ

たと伝えられる。この文によつて判斷すれば、天寶十四載
十二月の出動命令に應じた節度使の軍隊の中に、神策軍も
含まれていたと考えられるであらう。しかし果して衛伯玉
のひきいる神策軍が、このとき直ちに出動したか、とい
うと、疑問の餘地がある。それは、『舊唐書』¹¹⁵ 衛伯玉傳に
は、

肅宗即位。興師靖難。伯玉激憤思立功名。自安西歸長安。
初爲神策軍兵馬使出鎮。

とあり、伯玉が神策軍兵馬使となつて出動したのは、肅宗
即位の後であつたことがわかる。そしてそれ以前に神策軍
が出動したことを示す記事は見えない。故に神策軍の出動
は安史の亂の勃發直後ではなく、肅宗即位以後であつたと
思われる。そうすると、天寶十四載十二月哥舒翰にひきい
られて潼關の防禦に當り、翌年六月潼關を出て、崔乾祐の
反軍と戦つて慘敗を喫したところの河隴朔方等の兵の中に
は、この神策軍は加わつていなかったと推定される。

肅宗が靈武に即位したのは至德元載七月であつた。その
頃神策軍を統轄した隴右節度使は郭英乂であつたらしい。

『通鑑』²¹⁸ に、

隴右節度使郭英乂爲天水太守兼防禦使。

とあり、『新唐書』⁶⁷ 方鎮表によると、この年、天水郡太守が、防禦守捉使および大震關使を兼ねることになった。

『舊唐書』¹⁰ 肅宗紀によると、その即位直後に行なわれた異動で、隴右節度使郭英乂が天水郡太守となり、隴右兵馬使彭元暉が節度使となつたと伝えられる。當時の神策軍の指揮系統あるいは駐留地は明らかにできないが、おそらくなお隴右の土地にあつて、これらの人の管轄下にあつたのであろう。

先に哥舒翰が敗れたとき、河西・隴右の兵の損傷は少なくなかつたけれども、なおこの頃、河隴の勁騎は肅宗にとつて力強い希望であつた。また安祿山にとつても、河隴の將士の動向は事の成否に影響するところが大きい。祿山はその將高嵩を派遣して、河隴の將士を味方につけようとしたが、郭英乂はこれを斬つて斷乎たる態度を示した。⁽⁶⁾ 彼は反亂軍に備えて關西を固めていたのであるが、間もなく東に向つて進出することになった。この年十二月、彼は鳳翔太守となつた。⁽⁶⁾ それは、兩京回復のために、まず一步を踏み出して、この地を固めたことを意味するであらう。翌至

德二載二月、肅宗は鳳翔まで來たが、その地盤を固めたのは英乂であつたと思われる。續いて、隴右・河西・安西・西域の兵がここに集結した。その「西北守塞及諸胡之兵」といわれる中に、おそらく神策軍も含まれていたであらう。

その配置については、『通鑑』²¹⁹ に、

關内節度使王思禮。軍武功。兵馬使郭英乂。軍東原。王難得軍西原。

と記されているが、その先鋒たる郭英乂の軍は反亂軍と衝突して敗れた。英乂は負傷して敗走し、王難得もこれを救わずに敗走し、王思禮は扶風に退き、反亂軍の遊兵は鳳翔の近くに出没するようになった。この敗戦後の事態について、『冊府元龜』³⁹⁸ 將帥部、撫士卒に、

成如瑋爲特進。至德二年。關西節度郭英乂爲賊所敗。如瑋代英乂。収其餘卒於岐山。撫其瘡痍。招其遺散。三軍之士。有如挾纊。便以其衆。置興平軍於郿縣東原。肅宗以如瑋爲使。

とあり、敗走した郭英乂の部下は、成如瑋によつて收容され、それを興平軍としたといわれる。如瑋はもと神策軍使であつたが、このときは神策軍と直接關係があつたとは傳

えられない。彼が軍使となつた興平軍の中に、神策軍の兵が含まれた、と假定すると、この後、神策軍という名は姿を消してしまうはずである。故にそのようなことはありえない。神策軍は郭英乂の指揮下にあつたという公算もきわめて少ない。王思禮・王難得はともにも哥舒翰の部下で、隴右の軍隊とは關係が深いので、あるいは神策軍はそのどちらかの下にあつたのかも知れない。おそらく神策軍は衛伯玉の指揮の下に鳳翔の前面にあり、この時大きな打撃を受けることもなかつたのであろう。

神策軍の動きについて推測してみようとしても、この頃のことに関しては、明確な記録は残されていない。明らかに知られる情勢と矛盾しないように想像を進めるよりほかに致し方がないのであるが、一つの手がかりとして、『唐會要』⁷² 京城諸軍に、次の文がある。

神策軍。天寶初。哥舒翰破吐蕃於臨洮城西二百餘里。遂請以其地爲神策軍。朝廷以成如璆爲洮陽太守。兼神策軍使。及安祿山反。如璆使其將衛伯玉領神策軍千餘人。赴難于相州城下。官軍相州之敗。伯玉收其兵。與觀軍容使魚朝恩。同保陝州。

これによれば、唐軍對反亂軍の事態の推移——李嗣業・郭子儀・王思禮等の軍が長安の西方に集結し、至徳二載九月には西京を復し、續いて潼關を破つて、十月には東京をも復した——その事態の推移とともに、神策軍も東に向つて移動したであろう。そして乾元元年九月、郭子儀以下いわゆる九節度の大軍を擧げて、安慶緒を鄴城に圍んだが、翌年三月、かえつて史思明のために大敗を喫するに至つた。この戦鬪に参加していた神策軍は、衛伯玉にひきいられて、退いて陝州に駐屯した——と考えられる。

以上、安祿山の反亂勃發以後數年間における神策軍の動きについて、とぼしい史料によつて無理な推測を述べたが、この間の事情は、實は不明といわねばならぬほどである。

神策軍の名が、唐代の史書に、やや明らかな形であらわれてくるのは、その陝州駐屯以後のことである。陝州は軍事交通上の要地として知られ、陝西を保持するためにも、河南を維持するためにも、この地をまず確保しなければならぬ。陝州は陝西・河南の咽喉ともいふべき要地である。

神策軍の陝州駐屯以後の情勢については、唐代の史書にかなり記事があるから、その大略を知ることができる。し

かしたがいに矛盾する記事もあつて、すべてが明確にされ
るとはいえない。『唐會要』には先の文に續いて、

時西邊土地已沒。遂語伯玉所領軍號神策軍。以伯玉爲軍
使。與陝州節度使郭英乂同鎮于陝。觀軍容使魚朝恩亦在
焉。勅伯玉以其兵東討有功。遂加號神策軍節度使。伯玉
尋歸朝。英乂兼領神策軍節度使。尋追郭英乂爲僕射。其
軍遂統於觀軍容使。

とあり、神策軍の實權が、伯玉から英乂へ、さらに魚朝恩
へと移つたといわれるが、その實情について、考察を加え
てみたい。

もと神策軍のおかれていた隴右の地は、安祿山の反亂と
ともに、その軍隊の大部分は東方に向つて出動したため、
無防備に近い状態におかれたから、間もなく吐蕃の勢力下
におかれるに至つた。従つて乾元二年頃には、神策軍を故
地に戻すことは不可能であつた。いな、この時河北に史思
明を控えていたので、神策軍を故地に歸らせることなどは、
思いもよらぬことであつた。神策軍はそのまま陝州に駐屯
しつづけるよりほかはなかつた。もとより陝州は、河南か
ら河北へ進攻するためにも、關中を確保するためにも、重

要な據點であつて、この地にたゞ神策軍のみがあつたので
はなく、ほかの軍隊も集合駐屯したことはいうまでもない。

神策軍以外の軍隊としては、まず、陝虢華節度使のそれ
を挙げねばならない。乾元二年三月より來瑱が陝虢華州節
度使・潼關防禦團練等使として陝州に鎮した⁽⁸⁾。そこで神策
軍と陝虢華節度使の軍隊とは、同じ陝州において、それぞ
れ別個の軍隊であつた。『通鑑』²²¹に、

〔乾元二年〕十一月甲子。以殿中監董秦爲陝西神策兩軍
兵馬使。賜姓李。名忠臣。

とあるように、李忠臣を陝西神策兩軍兵馬使としたのは、
これらを統一的に動かそうとする意圖から出たのであろう
と考えられる。ところが『舊唐書』¹⁴⁵ 李忠臣傳には、

時陝西・神策兩節度郭英乂・衛伯玉鎮陝州。以忠臣爲兩
軍節度兵馬使。

とあり、この時、郭英乂・衛伯玉がそれぞれ陝西・神策兩
節度使であつたと傳えているが、これには疑うべき點があ
る。同じ『舊唐書』¹⁰ 肅宗本紀によると、乾元三年（閏
四月、上元と改元）四月に、

庚申。以右羽林大將軍郭英乂。爲陝州刺史。陝西節度。

潼關防禦等使。

とあり、英父は乾元二年末には、まだ陝西節度使ではなかつた。⁽⁹⁾ また伯玉が神策軍節度使になつたのは後述のように、上元元年八月であると思われる。かくして、乾元二年十一月には、「陝西・神策兩節度郭英父・衛伯玉」は存しなかつた。あるいは、李忠臣が兩軍兵馬使になつたのが上元元年八月以後のことであろうか、という、そうは考えられない。何故かという、乾元二年十二月、伯玉が陝州に寇した史思明の部將李歸仁の軍を礪子阪に擊破し、その功を以て鎮西四鎮行營節度使に任ぜられたのに續いて、李忠臣がまた歸仁等と永寧・莎柵の間に戦つて、しばしばこれを破つたと傳えられる。忠臣のこの事績は、彼が陝西・神策兩軍兵馬使になつてからのことと思われるからである。⁽¹⁰⁾ 従つて、上元元年四月、英父が陝西節度使になつたときには、彼自身神策軍使を兼ね、その下に李忠臣が兩軍兵馬使であつたと思われる。⁽¹¹⁾ ところが神策軍には、まもなく專任の節度使がおかれて、それは陝西節度使から獨立の形をとるに至つた。この年八月、先に鎮西四鎮行營節度使に移つた伯玉が、神策軍節度使として陝州に駐屯することになつたの

である。⁽¹²⁾

こうして、もとは單に隴右の一軍にすぎなかつた神策軍は安史の反亂に際して出動し、伯玉の指揮の下に陝州において功績を擧げ、おそらくその間に兵力も強盛を加え、ここに一節度使の下に統率されるに至つたのである。同じ陝州に駐屯した陝西節度使から獨立した形をもつに至つたのであるが、郭英父がもと隴右節度使であつた上に、なお李忠臣が兩軍兵馬使となつていたのであるから、神策軍は陝西節度使の軍隊と密接な關係があつたと思われる。

さらに陝西節度使・神策軍節度使と密接な關係をもつものとして、觀軍容使魚朝恩を擧げなければならない。『通鑑』²²⁰に、

「乾元元年九月」上以「郭」子儀・「李」光弼皆元勳。難相統屬。故不置元帥。但以宦官開府儀同三司魚朝恩。爲觀軍容宣慰處置使。觀軍容之名。自此始。

と、觀軍容使のおかれた由來が説明されるが、このとき元帥——總司令官をおき難かつたから、觀軍容使をおいたとしても、宦官魚朝恩が直ちに元帥に代る地位にあつたわけではない。郭子儀・李光弼以下いわゆる九節度は、唐朝の

ために安慶緒を討とうとしたのではあるけれども、いずれももと邊境に重兵を擁した武將ばかりで、唐朝としては彼等の向背について、幾分の不安がないこともなかつたであろう。反亂軍の側から、邊境の節度使に對して誘いかけが行なわれたこともあるという事實は、かれらが必ずしも唐朝に絶對忠誠とは限らなかつたことを示している。魚朝恩は、このような諸軍を監視し、唐朝との連絡を保つべき任務をもつたのであろう。これらの軍隊には元帥はおかれなかつたが、郭子儀の地位がもつとも重かつたようである。

しかしそれぞれ自分を誇りとする武將たちの間において、魚朝恩は、背後に唐朝を控えているだけに、その發言權はかなりの力をもつていたと思われる¹⁰³。朝恩は、安慶緒征討が失敗に終つた後も、そのまま觀軍容使であつた。そしてその地位を利用して、郭子儀をしりぞけたり、その河北征討の計畫を阻止したりした¹⁰⁴。陝州において、魚朝恩は自分の指揮し得る軍隊をもたなかつた。ところが衛伯玉はもと北衙軍使であつて、諸將の中では、もつとも唐朝宮廷との關係があつた。彼を神策軍節度使とすることによつて、朝恩は神策軍を自分の統率する軍隊に近いものとしようとし

たのではないだろうか。『新唐書』²⁰⁷ 宦者列傳、魚朝恩傳に、「朝恩以神策兵屯陝」とあるのは、この實情を端的に示すものであろう。

節度使にひきいられた神策軍が最初に經驗した戰鬪は、上元二年二月、李光弼・僕固懷恩と共同して行なつた洛陽攻撃であつたが、これは全く失敗に終つて、魚朝恩・衛伯玉はもとの陝州にもどつた¹⁰⁵。この場合、陝西節度使郭英父の軍隊は動員されなかつたようで、攻撃の主唱者朝恩は伯玉とともに行動したことは注目すべきであらう。續いて三月には、史朝義の兵を礪子嶺にむかえて、これを擊破し、反亂軍の陝州攻略の意圖をはばんだ。これは史思明・史朝義の間に軋轢を生ずる動機となり、遂に朝義は思明を殺すに至つたのである。また建子月（十一月）、伯玉は朝義を攻めて、永寧を抜き、澠池・福昌・長水等の縣を破る功績を立てた。先の戦いについて、『新唐書』²⁰⁷ 魚朝恩傳には、朝恩按兵陝東。使神策將衛伯玉。與賊將康文景等戰。敗之。

とあるように、神策軍は節度使衛伯玉の指揮下にあつたが、さらにその上で魚朝恩がこれを監視指導し、動かしていた

と思われるのである。『通鑑』によると、少なくとも上元二年の末までは、なお伯玉が神策軍節度使であつたことはたしかである、ところがその翌年、すなわち代宗の寶應元年十月、雍王适・僕固懷恩等の統率する諸道節度使および回紇の大軍が、陝州に集結して、史朝義を攻撃することになったが、このとき、衛伯玉の名はあらわれて来ない。のみならず、『通鑑』²²²には、

諸軍發陝州。僕固懷恩與回紇左殺爲前鋒。陝西節度使郭英父・神策觀軍容使魚朝恩爲殿。

と傳えられている。朝恩は、かつて實質上支配していた神策軍を、ここにおいて完全に掌握し、自ら神策觀軍容使と稱するに至つたのであろう。觀軍容使はもと自分の軍隊をもたなかつたが、ここにいたつて、名實ともにそれをもつことになつたのである。先にあげた『唐會要』72の文によると、伯玉が神策軍節度使の地位を去つて中央へ歸り、郭英父がまたそれを兼領し、その後、英父を僕射として、神策軍は觀軍容使に統べられるにいたつたと説かれる。伯玉のあと、英父が神策軍節度使を兼ねたかどうか、またこのとき神策軍節度使という地位があつたかどうか、それらの

點について疑問の餘地が残り、いずれとも判断しかねるが、とにかく神策軍の支配者は魚朝恩となつた。

『舊唐書』11代宗本紀には、

戊辰。元帥雍王率諸軍進發。留郭英父・魚朝恩。鎮陝州。とあるが、神策軍は殿軍としてではあるが、陝州から出動したようである。東京回復のための戰鬪には活躍もしなかつたが、たゞ回紇や朔方の軍隊とともに掠奪したということとは傳えられている。⁽¹⁾この征討によつて、史朝義の軍を破り、唐朝は洛陽を回復した。そこで反亂軍の諸將も唐朝に降るものが多く、ついに朝義は降將李懷仙に殺され、安史の亂はようやく平定されるに至つた。神策軍はまもなく、もとの如く陝州に駐屯することになつたようである。そして大亂平定以後の新しい情勢の下に、神策軍も新しい發展をとげて行くのである。

註

- (1) 日野開三郎氏「唐代藩鎮の跋扈と鎮將」(上)『東洋學報』二六〇四
- 同氏「支那中世の軍閥」
- (2) 濱口重國氏「府兵制度より新兵制へ」『史學雜誌』四一〇一一・一
- 二
- (3) 『通鑑』二一七に、

以榮王琬爲元帥。右金吾大將軍高仙芝副之。統諸軍東征。出內府錢帛。於京師募兵十一萬。號曰天武軍。旬日而集。皆市井子弟也。十二月丙戌。高仙芝將飛騎驍騎及新募兵邊兵在京師者合五萬人。發長安。

- (4) 『通鑑』二二六、『新唐書』一三五哥舒翰傳、『舊唐書』一〇四哥舒翰傳。

- (5) 『通鑑』二二八。

- (6) 『舊唐書』一〇、肅宗本紀。

- (7) 『通鑑』二一九、李泌の言。

- (8) 『舊唐書』一〇に、

〔乾元二年三月丙申〕以河西節度副使來瑱。爲陝州刺史。充

虢華節度・潼關防禦團練等使。

『舊唐書』一一四來瑱傳に、

以瑒爲陝州刺史。充陝虢等州節度并潼關防禦團練鎮守使。

『通鑑』二二二に、

以河西節度使來瑒。行陝州刺史。充陝虢華州節度使。

- (9) 上元元年（乾元三年）四月に、陝虢華節度使が陝西節度使と改稱され、節度使は來瑒から郭英乂に代つた。（『新唐書』六四、方鎮表）『通鑑』二二二に、來瑒の職名を陝西節度使と記すのが正しいとすれば、改稱は交替直前であつたかも知れない。

- (10) 『通鑑』二二二。『通鑑』は衛伯玉を「神策兵馬使」とし、『舊唐書』一〇には「神策將軍衛伯玉」とあり、『新唐書』六には、「神策軍將衛伯玉」とある。彼は正式にはなお神策軍兵馬使であつたが、戦功によつて鎮西四鎮行營節度使（『新唐書』一四

一衛傳には四鎮北廷行營節度使）となつた。これより先、乾元二年三月、荔非元禮が懷州刺史となり、鎮西北廷行營節度使を權知していたが、十月には、反亂軍の將、安太清が懷州に據るに至つた。『通鑑』二二二には、十一月に、「發安西北廷兵。屯陝。以備史思明。」とあり、衛伯玉はやはり陝州にいたのであろうが、一時もとの神策軍を離れたのであろう。

- (11) 『舊唐書』一一七、郭英乂傳に、

朝廷方討史思明。選任將帥。乃起英乂爲陝州刺史。充陝西節度潼關防禦等使。尋加御史大夫兼神策軍節度。

とあり、彼が陝西節度使になつたのは、上元元年（乾元三年）四月である。これによると、まもなく彼が神策軍節度をかねたようであるが、『新唐書』六四、方鎮表には、上元元年に、改陝虢華節度。爲陝西節度。兼神策軍使。尋置觀察使。

とあり、おそらく彼が陝西節度使となるとともに、あるいはその後まもなく、神策軍使を兼ねたのではないだろうか。はたしてこの時神策軍節度使があつたかどうか、疑うべきであろう。

- (12) 『通鑑』二二二、唐長孺『唐書兵志箋正』三。

- (13) 『通鑑』二二二、乾元二年正月、朔方軍とともに、史思明を攻撃せんという李光弼の作戦は、魚朝恩が不可としたため、實行されなかつた。魚朝恩は武將でなかつたが、作戦上にも發言力をもつていた。

- (14) 『通鑑』二二二、乾元二年六月および上元元年九月。

- (15) 『新唐書』五〇、兵志に、

上元中。以北衙軍使衛伯玉。爲神策軍節度使。鎮陝州。中使

魚朝恩爲觀軍容使。監其軍。

(6)(7)『通鑑』二二二。

三

もと邊境におかれた一軍にすぎなかつた神策軍は、安史の亂に際して、陝州に駐屯することになり、觀軍容使魚朝恩がこれを領するに至つた。この神策軍の變質あるいは發展の經過について、そこに格別の必然性を見出すことは困難であらう。また神策軍が魚朝恩と結びついたことについても、神策軍のもともとの性格の中に、そのような結果をまねく理由を求めることはできない。邊境の軍が節度使の指揮下に出動したことも、特に神策軍のみに限られたことではない。朝恩と結びつくのが神策軍でなければならぬという必然性はなかつた。しかし觀軍容使の領するところとなつてから、神策軍は、その特別な性格をあらわにして行くことになつた。

魚朝恩のひきいる神策軍の發展は、偶然にも、それが最初に備えていた吐蕃の侵入という事實によつて、もたらされたのである。すでに述べたように、安祿山の反亂とともに

に、邊境の精銳は、その大部分が反亂鎮壓に向けられ、かつて太宗以來苦心經營してきた對外問題については、ほとんど力を用いる餘裕もなく、従つて對外政策もきわめて消極的とならざるを得なかつた。西北邊境はほとんどなるがままに任せられた状態で、この大亂を契機として、回紇・吐蕃等との勢力關係に大きな變化を生じた。その全體的な情勢についてここに述べる必要はないが、ただ吐蕃勢力の東方擴大の經過について概觀しておきたい。

『通鑑』²¹⁹によると、早くも至徳元載八月に、威戎・神威・定戎・宣威・制勝・金天・天成等の軍と石堡城・百谷城・雕窠城とを、吐蕃に奪取されたと傳えられている。すなわち哥舒翰が新しく經營に乗り出そうとした根據地の大部分が、逆に吐蕃の據る所となつたことを意味する。隴右の土地には、もはや往年の精銳は存在しないから、その後の吐蕃の東方進出には、ほとんど障害はあり得ない。その後、唐の隴右における諸要地は、まず至徳二載十月に鄯州、乾元元年には河源軍、上元元年には廓州、というふう

に、吐蕃の勢力下に没して行つた。このような吐蕃にとつて有利な情勢において、吐蕃はしばしば唐に和親を求めて

きた。これに對して唐の態度は、『新唐書』216上、吐蕃列傳に、

然歲内侵取廓鞘岷等州及河源莫門軍。使數來請和。帝雖

審其譖。姑務紓患。乃詔宰相郭子儀蕭華裴遵慶等與盟。

とあるように、全く受身的退嬰的とならざるを得なかつた。しかし吐蕃の勢力擴大はこれにとどまるものではなかつた。

安史の大亂がつづくうちに、隴右の蘭・廓・河・鄯・洮・岷・秦・渭・臨・成の諸州は、すべて吐蕃に入つてしまつた。⁽²⁾

安史の大亂をようやく鎮定し得た代宗の廣德元年七月には、吐蕃は大震關をも手中に収め、河西・隴右の地はことごとくその有に歸し、鳳翔以西・邠州以北はみな左衽となつたと嘆かねばならぬ情勢に至つたのである。しかも吐蕃の攻勢はとどまらず、涇州を降して、刺史高暉を京師進撃の嚮導とし、十月には邠州から奉天・武功・整屋へとその鋒先は伸び、京師の危機は目前に迫つた。このとき京師を守備すべき有力な軍隊は存在せず、禁軍は、その數においても質においても、問題にならぬ弱勢であつた。従つて代宗のとり得る途は、東に向つて避難し、後の處置は郭子儀

等の武將に委ねることのみであつた。東の方、陝州には神策軍その他の軍隊もあり、代宗の身の安全を期するには、行くべきところは陝州において外には求められない。かくして代宗は陝州に出家することとなり、まず華州に至つた。たまたまこの時、觀軍容使魚朝恩が神策軍をひきいて陝州より來迎し、代宗は神策軍を頼り得る唯一の軍隊として、陝州に避難することができたのである。こうして神策軍は直接唐朝皇帝と結びつけられることになつた。神策軍は、宦官魚朝恩の勢力下にあることによつて宮廷的色彩を帯びた軍隊であつたが、この皇帝出家という事實は、さらにその色彩を濃厚にさせた。皇帝あるいは宮廷との間接的な關係は、ここに至つて直接的關係となり、この時事實上禁軍としての役割をもつことになつたというべきであらう。

吐蕃の入寇に對して、代宗は諸道の兵を召したが、はなはだ成績が上らなかつた。それは、程元振が宮中にいて權力をほしいままにしたためであるから、まず彼を斬らねばならぬと、太常博士柳伉は主張した。彼によれば、内外ともに離反し、ただ一魚朝恩のみ陝郡を以て協力するという國家の危機に直面している。この危機を打解するためには、

元振の首を斬つて天下に知らせ、内使を宮中から出して諸州の管下におき、ひとり朝恩を留めて左右に備え、陛下が神策兵を持してこれを大臣に付し、然る後、自新改過の誠意を示して、天下に兵を求むべきである、というのである⁽³⁾。當時四方すべて不安な情勢の中にあつて、代宗の頼り得るものはたゞ魚朝恩の神策軍のみであつたことが知られる。郭子儀はじめ諸將のひきいる軍隊に對する希望は大きかつたに相違ないが、それらに對する唐朝の威令は完全には行なわれず、また禁軍も逃散した現實に直面して、この時、代宗の安全については、ただ神策軍に期待する外はなかつたと思われる。

神策軍は代宗の身邊警護に當つただけではなく、陝州・華州にその勢力を確立した。すなわち廣德元年十月、朝恩の部將皇甫溫を陝州刺史とし、周智光を華州刺史としたことがそれである⁽⁴⁾。先の唐會要の文によると、これより先、郭英乂が陝西節度使の地位を去り、その軍隊は朝恩に統率されたようであるが、皇甫溫は英乂の後を繼いで陝州刺史・陝州節度使となつたのである。また周智光は、先に程元振の譴するところとなつて自殺した李懷讓の後をうけて、

華州刺史・同華二州節度使・潼關防禦使となつたのである⁽⁵⁾。こうして潼關附近の要地に朝恩の部將を配置したのは、このとき長安を占據した吐蕃に備えるためであることはいふまでもないが、朝恩の勢力が確固たるものにされたことも疑いない。魚朝恩、その神策軍、その部將の軍隊は、このとき代宗にとつては、絶對的信賴をよせ得るものとなつた。従つて、郭子儀等の力によつて、吐蕃を一應撤退させた後、すなわち十二月、代宗が長安に歸ると、朝恩を天下觀軍容宣慰處置使とした。彼は神策軍をひきいて禁中に入ることになつた。陝州において禁軍の役割をもつていた神策軍は、その役割をそのまま長安にもちこんだのである。しかし禁中には、もともと禁軍があつた。神策軍はいわゆる北軍とは別のものとして禁中に入ることになつたのである。『新唐書』50兵志に、

及京師平。朝恩遂以軍歸禁中。自將之。然尙未與北軍齒也。

とあり、神策軍の勢力は北軍におよばなかつたと伝えられる。

唐の禁軍は南衙衛兵と北衙禁軍とを意味するが、府兵制⁽⁶⁾

度の崩壊後においては、單に禁軍といえは北衙禁軍を指した。それは、府兵制度の崩壊による南衙衛兵の凋落とともに、それによつて生ずる京師防禦上の欠陥を補う必要から北衙禁軍の發展がもたらされ、北衙禁軍が禁軍の大部分を占めるようになったからである。神策軍が禁軍に入つた頃、禁軍はいわゆる北衙（牙）六軍、すなわち左右羽林軍・左右龍武軍・左右神武軍がその主なものであつた。これらがそろつたのは、ようやく至徳二載の末であつた。左右羽林軍は玄宗の龍朔二年におかれ、左右龍武軍は羽林軍所屬の萬騎を玄宗の開元二十六年に獨立させたのにはじまる。すなわち安祿山の反亂が起つた頃、北軍の數は四軍であつた。これらの禁軍には、長官として大將軍、次官として將軍があり、その組織は從來の諸衛に近く、その任務も天子東宮の宿衛儀仗から長安の警備にも當つた。その兵は、有官有品者の子弟や長安附近の富裕なもの、または外國出身者などで、一種の貴族的色彩を帯びて、實戰の經驗もなく、節度使の軍隊とは比較にもならぬ脆弱な軍隊であつたと思われる。天寶の頃、その兵員は四軍合せて六萬ぐらいといわれるが、一朝事あれば、——たとえば肅宗が靈武に行つた

ときなど、——たちまち彼らは逃散し、ものの役に立ちそうにもなかつた。

肅宗の至徳二載十二月、主として元從の子弟を以て左右神武軍を組織した。先の四軍と合せて、ここに北衙六軍が成立した。またこの時、騎射にすぐれたもの千人をえらび、衙前射生手（供奉射生官または殿前射生手ともいう）とし、これを左右廂に分けた。⁽⁸⁾ こうして禁軍の組織は強化されたということができる。

禁軍は禁中に常屯する軍隊であるから、これを掌握するものは禁中に絶大な勢力をもつことができる。肅宗の頃から禁軍を事實上把握したのは宦官であつた。宦官がそのような力をもつに至つた由來はしばらく問わない。肅宗の時代には、李輔國が禁兵を掌握し、宰相以下百官を抑えて、宮廷内に權力をふるい、政治を亂した。その上、その力は外にもおよび、節度使はみなその門から出たといわれたほどであつた。⁽⁹⁾ 彼が自分をばはむものをしりぞけて專横を極めたのは、禁軍を自由にすることができたからである。代宗の即位後、もと李輔國の下で内射生使であつた程元振がこれに代つて禁兵を掌り、唐朝の危機を招いたことは、柳

仇の言葉によつて明らかである。

廣徳元年十月、吐蕃の侵入に際して、禁軍は再びその無力を暴露した。吐蕃が長安に迫り、便橋を渡ると、京師を守り天子を警護すべき六軍は逃散してしまつた。その上、混亂に乗じて射生將王猷忠の反亂さえ起つた。逃散した六軍の兵は所在に剽掠し、その多くは京師の東南方にあたる商州に逃げこんだが、ようやく郭子儀の下に、武關の防兵とともに吸収され、長安の回復に力をいたすことになつたのである。そして子儀の指導の下に、左羽林大將軍長孫全緒、寶應軍使張知節、射生將王甫等の謀略的活動によつて、ほとんど戦鬪もせず、吐蕃を撤退させることができた。ところが射生將王甫（または王撫）が京兆尹と自稱し、長安を支配しようとする不祥事件が起つた。しかしこれは郭子儀によつて容易に鎮定され、長安は平靜に歸つた。代宗が京師に歸還したとき、郭子儀は、城中の百官および諸軍をひきいて滻水の東に迎えたと傳えられるが、その諸軍といわれるものには、多くの禁軍が含まれていたと推測される。しかし『通鑑』²²³には、

〔廣徳二年正月〕吐蕃之入長安也。諸軍亡卒。及鄉曲無

賴子弟。相聚爲盜。吐蕃既去。猶竄伏南山子午等五谷。所在爲患。

とあり、この諸軍の亡卒の中には、なお京師に復歸しなかつた禁軍の兵も含まれていたであろう。要するに吐蕃の侵入によつて禁軍の弱さは露呈され、その撤退後には、禁軍の兵数は相當減少していたであろうと思われる。まさにこのような情勢に際して、神策軍が禁中に常屯するようになったのである。

當時の禁軍は、ほとんど戦鬪力をもたない軍隊であつて、ようやく吐蕃をしりぞけて長安を回復した代宗は、復歸した禁軍のみに頼ることはできなかつたであろう。このように、當時の禁軍の實情からいつても、また周圍の情勢——吐蕃はなお遠く退いたわけではなく、四方には強力な軍隊をもつ藩鎮があり、しかもそれらは必ずしも唐朝に忠實とも限らないという情勢——からいつても、まず禁軍の強化が痛切に要求されたであろう。この要求に應ずるものとして、第一に神策軍が考えられることは、陝州における事態から當然のことである。こうして神策軍は禁中に常屯することになつたのである。

この時、神策軍は北衙六軍に編入されたのではない。六軍は依然として六軍のまま存在し、その外に神策軍も禁中の軍隊となつたのである。しかもその當初においては、神策軍の勢力はなおもとの六軍に及ばなかつた。しかし神策軍はもと外にあつて戦鬪の経験をつみ、代宗の陝州出幸に際して、代宗とは密接に結びついていた。また程元振失脚の後、魚朝恩がかつて禁兵を掌握することになれば、神策軍は大きな力をもつようになることが當然豫想される。神策軍が禁中に入つた最初において、それはその後における發展の可能性を自らの中にも統率者の中にももつていたと考えられる。その契機は僕固懷恩・回紇・吐蕃の入寇によつて與えられた。

廣德二年十月、僕固懷恩は、回紇・吐蕃とともに、邠州から奉天へと迫つたが、大事に至らずして退いた。ところが翌永泰元年九月、懷恩はふたたび回紇・吐蕃・吐谷渾・黨項・奴刺など數十萬とともに入寇した。吐蕃は北道より醴泉・奉天へ、黨項は東道より同州へ、吐谷渾・奴刺は西道より整屋・鳳翔へと進み、京師をおびやかした。⁽⁴⁰⁾これに對する唐朝の防禦體制は、涇陽に郭子儀、奉天に渾瑊・白

元光、東渭橋に李忠臣、雲陽に李光進、便橋に馬璘・郝廷玉、整屋に駱奉仙・李日越、鳳翔に李抱玉、同州に周智光、坊州に杜冕、という配置であつて、代宗みづから六軍をひきいて苑中に屯した。當時、六軍の中に神策軍は含まれていなかったが、『新唐書』50兵志に、

永泰元年。吐蕃復入寇。朝恩又以神策軍屯苑中。

とあり、神策軍は六軍とともに代宗の身邊を護つたことは明らかである。また軍隊の配置をみると、禁軍あるいは魚朝恩と關係あるものが多いといえる。周智光はもと朝恩の部將であつたし、郝廷玉は神策將軍で、そのみごとに訓練ぶりで朝恩を感嘆させたといわれ、⁽⁴¹⁾内侍駱奉仙、將軍李日越も朝恩と親しい關係があつたと思われる。また李光進、馬璘、李忠臣等も禁軍または神策軍と關係があつた。⁽⁴²⁾そして朝恩は六軍・神策軍をひきいて代宗の傍にあり、その兵力を背景とする彼の力は大きかつた。吐蕃が迫つたとき、彼は白刃をもつて禁軍十餘人を従え、官僚たちを威壓しながら、河中への遷幸を決定しようとした。これは成功しなかつたけれども、宮廷における彼の力を知り得る事件であつた。⁽⁴³⁾

このとき苑中に屯した禁軍には、特に積極的な軍功があったわけではない。従つて朝恩は、そのひきいる軍隊の活動によつて勢力を得たとはいひ難い。しかし京師で賊手に歸することなく、とにかく無事であり得た。その間に、禁軍をひきいて代宗の周圍に常にいたということが、彼の勢力を増大させる結果となつたのである。『通鑑』223に、

〔廣德元年十二月甲午〕以魚朝恩。爲天下觀軍容宣慰處置使。總禁兵。權寵無比。

とあり、彼はすでに禁中に入るとまもなく、先に失脚した程元振に代つて、禁軍を統率することになつた。しかし、その故に神策軍との關係が絶たれたのではない。從來彼の權力の基礎となつていた神策軍を、この後も領していた。

従つて禁軍を背景として彼の權力が増大すると、それとともに彼と密接な關係のある神策軍が、禁中の軍隊の中でも相對的に優位を占めて來たと考えられる。もちろん神策軍の勢力の上に彼の勢力が築かれて行くという點も見逃せない。兩者はたがいにからみ合つて發展伸長していく。けれども今、この永泰元年における事態のみをとつて考えると、神策軍のみに特別な軍功があつたわけではなく、神策軍をも

含めての禁軍を背景として魚朝恩の勢力が伸び、それにもなつて彼と特別の關係にある神策軍が他の禁軍より上に出るようになったと思われる。その結果、この事件が主として郭子儀の活動によつて終つた十月、神策軍を左右廂に分けた。ここでそれは正式に禁軍に加えられたといふことができるが、その勢力は他軍の上に出るようになった。

神策軍は、廣德元年陝州から禁中に入つたとき、すでに事實上禁軍たる役割をもつていた。さらにさかのぼつて、代宗が陝州にいた時、すでに禁軍としての役割を果していたともいふことができる。しかし形式的には、禁中に入つてからもなお禁軍と呼ばれなかつたようであるが、永泰元年に至つて、正式に禁軍たる神策軍が成立したのである。なお他の禁軍とならべて北衙八軍と呼ばれるには至らないけれども、その實勢力は他軍以上であつたのである。それは神策軍の素質、過去の成績、および魚朝恩との特別な關係にもとづくものに外ならぬであらう。

(一九五九・七・三〇)

註

(1) 『通鑑』、『舊唐書』一九六吐蕃列傳、『新唐書』二一六吐蕃列

傳による。

- (2) これらの吐蕃に没した年次については、『元和郡縣志』三九、『新唐書』四〇地理志、兩『唐書』吐蕃傳に記されているが、その記事にはいちじるしい喰違いがあつて、一一の年次を正確に定めることは難しい。
- (3) 『新唐書』二〇七、宦者列傳上、程元振傳、『通鑑』二二三。
- (4) 『通鑑』二二三。
- (5) 『舊唐書』一一四周智光傳、『冊府元龜』六六九、內臣部、朋黨。吳廷燮『唐方鎮年表』四、八。
- (6) 禁軍に關する概観は、主として濱口重國氏「府兵制度より新兵制」(史學雜誌四一—一二・一二)による。
- (7) 『通鑑』二二〇、胡注に、
元從子弟。謂從帝馬嵬北行。及自靈武還京師者。
神武軍については、唐長孺『唐書兵志箋正』三參照。
- (8) 『新唐書』五〇兵志によると、衙前射生手を左右英武軍と號したと傳えられるが、その點には疑問がある。『唐書兵志箋正』三參照。
- (9) 『通鑑』二二一。
- (10) 『通鑑』二二二、胡注に、
以宦官領射生手。故曰內射生使。
- (11) 『通鑑』二二三。
- (12) 『通鑑』二二三、『新唐書』一二四上、叛臣列傳、僕固懷恩傳。
- (13) 『舊唐書』一五二、郝廷玉傳。
- (14) 李光進は廣德二年二月より禁兵を掌つた。『通鑑』二二三(馬

璘は吐蕃の入寇に際して雄名あり、禁旅を委ねられた。『舊唐書』一五二、馬璘傳(李忠臣はもと神策兵馬使であつた。

(15) 『通鑑』二二三。

(16) 『通鑑』二二三。『新唐書』五〇兵志。なお『唐會要』七二に、

興元克復。(李)晟出鎮鳳翔。始分神策爲左右兩。

とあるは誤り。曾我部靜雄氏「兩と兩軍との關係」(東亞經濟研究二六—)參照。

會 告

本年は十一月二十日に、日本學術會議會員選舉が行われますが、本會は

近畿地方區第一部候補者として

東洋史研究會評議員

貝塚茂樹氏

を推薦することに決定いたしましたから、左様に御諒承下さる様お願いいたします。

東洋史研究會

supposes that Wei-shou himself must have written "Juan-juan", not "Hsüing-nu" in his original edition, judging from the fact that the word "Juan-juan" occurs in the corresponding position both in the texts of the T'ung-tien and T'ai-p'ing-huan-yü-chi. Moreover the Juan-juan's invasion of Ta-yüeh-shih State can be dated about 437 A.D. when the Juan-juan extended their power in the west, as far as the Ephtalite. Marquart says in his article that the Hsiao-yüeh-shih State was founded by Kunghas, the son of Kidara, about 468 A.D. when he was defeated by the Persians. But in the opinion of the author, it was founded by Kidara to whom another son, not Kunghas, succeeded after Kidara was driven out of the Lu-chien-shih Castle.

The pre-history of Shen-t'sê-chün 神策軍

Tatsuo Obata

The Shên-t'sê-chün is famous in history for its great influence over the politics of the T'ang 唐. It was the most powerful body in the Chin-chün (禁軍, the Imperial Guards). But originally it had been created not as a detachment of the Imperial Guards, but only as one of the frontier guards. Why did it come to belong to the Imperial Guards? The author tries to present an answer, tracing its career through the An-Shih 安史 Rebellion and the Tibetan's invasion of China.

Tao-yen 道衍 (Yao Kuang-hsiao 姚廣孝)'s Life

Tairyô Makita

T'ai tsung 太宗, the Second Emperor of the Ming 明, made his way to the throne by disloyal means, i.e. the Ching-nan 靖難 Rebellion. And the ringleader of this rebellion is asserted to be the Buddhist monk, Tao-yen, 1335-1418. Afterwards he was "graciously permitted" to return to secular life by the supreme command of the emperor and then given the